

動物をめぐることばと表現(2)

—犬との生活から見える「家族」関係とジェンダー表現—

佐々木 恵理

1. はじめに

「〇〇は家族の一員です」という言い回しをよく聞く。「〇〇」に入るのは家庭で飼っている動物やその名前である。このような動物を指していた「ペット（愛玩動物）」は、すでに「コンパニオン・アニマル（伴侶動物）」ということばにとり代わっているし、かつて「雑種」と呼ばれていた猫は「日本猫」や「ハーフ」⁽¹⁾へ、犬は「ミックス（MIX）」へと、より肯定的な呼び名に変化している。生活を共にする動物は可愛がるだけの単なる猫や犬以上の存在であるという意識や、命は等しく尊いのだから純血種の猫や犬だけに高い価値をおくような考え方はやめようという意識がことばを換えてきたのである。こうした言い換えは、ささやかではあるが動物の地位向上に貢献していると言えるだろう。

本稿では、このような「家族」としての動物のうち犬に焦点を当て、犬との生活から見える「家族」関係を捉えながら、飼い主のもつジェンダー意識がどのように表現されているかを考察する。

2. 調査について

今回の調査では、犬の月刊誌『WAN』（ペットライフ社）の2000年1月号から12月号を用い、その中の読者の投書ページ「LETTER BOX!（レターボックス）」⁽²⁾からことばを抽出した。掲載されている投書には、たいいてい、自分の犬の種類、名前、性別、年齢が記されており、自分と犬との出会い、犬との日常生活、犬の病気の経過、犬の集まりやイベントへの参加、犬連れの旅行、また他の飼い主や犬との交流などが報告されている。中にはアイデアグッズの紹介や捨て犬の保護、飼い主のマナーなど、自分の犬が話題の中心ではない場合もある。全体の印象としては、自分の犬が如何に可愛い（可愛かつ

たか)、また自分が如何に犬を可愛がっているのかという思いを伝えようとしているのが特徴である。

このコーナーの掲載総数は193で、女性の投書180、男性9、匿名希望等の性別不明4で、女性の投書は全体の93.3%を占める。投書の内容やスナップ写真から推察すると、投稿者は、結婚していて子どもがいる、またはいない女性か、親と同居している女性が多いようだ。つまり、独り住まいの人や高齢者の投稿はほとんどないと言える。また常連の投稿者が複数いて、そうした書き手がこのコーナーの雰囲気を作り出しているように思える。犬の飼育方法はほとんどが室内飼いで、犬はいつも飼い主と一緒にいる環境だと判断できる。

次の各章から、飼い主と犬との「家族」関係を表すことばを示しながら、それがどのようにジェンダー表現と関わりをもっているのかを分析してゆく。引用は、すべて女性の投稿者によるものであり、特別な場合を除いては引用の前後を略したことは記さないこととする。下線はすべて筆者によるものである。また、投書が掲載された人のことをここでは「投稿者」と呼ぶことにする。

3. 親であること、母であること

(1) NaNaはきっとママよりとうたん[父さん]の方が好きなのね (萌はママの方が好きだけど)。でもとうたんは「おまえがおらんくなると2匹で探しているぞ!」と言ってくれます。本当かなあ〜。(4月号)

まずは数字から見てみよう。投稿者自らとその配偶者に準ずる家族(以下、配偶者)を「母／父」「ママ／パパ」など(以下、「母／父」と呼んでいる投書は掲載総数全体の17.1%、投書に登場する他の飼い主に対して「母／父」と呼んでいる(編集者のコメント⁽³⁾も含む)のは8.8%であり、全体として「母／父」の呼称が用いられている投書数は21.2%であった⁽⁴⁾(具体的な呼称は表1を参照のこと)。

(表1) 投書に用いられている親を表す呼称

飼い主の家庭内における配偶者間での呼称

他の飼い主に対する呼称

女性		男性	
ママ	16	パパ	7
母	9	お父さん	3
お母さん	3	〇〇パパ	3
〇〇ママ	3	とうたん	1
母ちゃん	2		
かーちゃん	1		

女性		男性	
お母さん	7	お父さん	4
〇〇ママ	3	パパ	3
ママ	2	〇〇父	1
〇〇のママ	1		
〇〇母	1		
〇〇のママさん	1		
ワンコママ	1	*〇〇父母	1

(数字は投書の数：重複あり)

2匹の犬と生活をしている筆者の実感としては、犬との関係において配偶者どうしが互いに「母／父」で呼び合うことは言うまでもないが、特に飼い主の名前を知らない者どうしのコミュニケーションにおいては、女性の飼い主を「お母さん」や「ママ」、男性の飼い主を「お父さん」や「パパ」として飼い主どうしが互いに呼び合うのはごく自然な日常の情景だと断言できる。散歩などで会う単なる顔見知り程度の関係や、一過性の関係でしかない飼い主どうしが直接話をする場合には、名前をお互いに知らせたくないという意識が強く働く。だから、相互のプライバシーには立ち入ることなく、かつ円滑なコミュニケーションを成立させるためには、「母／父」の使用は非常に理にかなった使い方なのである。

そう考えると、投書の中の「母／父」の登場率は低いと言えるのかもしれない。だが書きことばの中での使用ということからすると、少なくとも飼い主と犬との関係を「親子」とする表現は定着していると言えるだろう。

おそらく投稿者のほとんどは、日常的に配偶者間で「母／父」と呼び合ったり、また他の飼い主をそう呼んだりしているはずなのだが、投書ではそうした呼称を嫌ったために、それが数字に表れていないだけなのであろう。だから引用(1)に見られるように、書きことばとして「ママ」や「とうたん」を使うと、むしろ飼い主と犬とが密接な「親子」関係にあることを強調してしまうことになる。この場合、ある種の効果を狙って書くのであれば、「私はこの犬の親であり、親としてこんなにもこの犬を愛しています」といういさ

さかべたべたした個人的で情緒的なメッセージになってしまうために、多くの投稿者はあえてそうした記述を避けているのであろう。

「母／父」の使い方として独特の語感をもつのが、犬の名前（の一部）または犬を表す名称に「母／父」などを加えて造られた呼称である⁽⁵⁾。

(2) その日、うめママは用事のため、早く家を出る予定でした。（7月号）

(3) いつも楽しそうなプーちゃんズママ（1月号）

(2)は「うめ」という犬の名前に「ママ」をつけたもの、(3)は犬種のプードルを「プーちゃん」、それに英語の複数形の響きをもつ「ズ」を加え⁽⁶⁾、最後に「ママ」をつけたものである。

こうした呼称は、インターネットの犬関連の掲示板の投稿者名（ハンドルネーム）によく見られるが、これはその犬の飼い主であるということを示す造語が愛称として固有名詞化したものだと考えられる。そうだとすると、(2)のように呼称が自称として表現されると、「ゆみリン（＝私）はそういうの好きじゃない」と同様の子どもっぽく甘えた響きをもつ表現になるし、また(3)のように他称として用いられると、その呼称で通っているほどの名の知れた人であるか、もしくはそう呼んでしまっても問題がないほど日常的に深い付き合いをしていることを感じさせる。本来愛称は馴れ馴れしい仲間ことばとしての側面が強いので、見知らぬ飼い主どうしが直接会って話す日常のコミュニケーションの場ではこうした呼称が聞かれることはまずない。

このような呼称は「犬の名前＋母／父」という単純な構造なので造りやすく、犬の名前が入っていて、また「母／父」から飼い主の性別も判断できる。そのため一般の愛称と異なり、誰にでも分かりやすく使いやすい。また、この呼称は親である人間を指しているにもかかわらず、あくまでも犬が主体である。しかもこの呼称は愛称が固有名詞化されたものなので、「親」たる人間の存在が犬の陰に隠れてしまうということもない。例えば、「ロンちゃんのママさん」と「ロンママ」（共に、2月号）という呼称を比べてみよう。前者は格助詞の「の」が付いているために「ママ」が「ロンちゃん」に属していることが強調される。よく女性が母親になったとたん、「〇〇ちゃんのお母さん」

としてしかその存在を認めてもらえないと感じるのはこのためである。だが後者の「ロンママ」は「ママ」本人を表す呼称である。

さて、投稿者のほとんどが女性であることに注目してみよう。女性の投稿者は、好むと好まざるとに関わらず、時に「女性の飼い主＝母」としてのジェンダー役割を背負わされてしまうこともある。犬の耳掃除をまめにしているという女性は「よく人間のお母さんが子供の耳を掃除し過ぎて痛くしたという話を聞きますが笠原さんも同じようですね」（5月号）と編集者から母親役割を押しつけられている。言うまでもないことだが、そこには明らかにステレオタイプ化された「女性＝母」という図式が前提としてあるのであろう。ちなみにこの投稿者は投書の中で、自らを「母」として表現していない。

だが、このように外から「母」であることを押しつけられることはあっても、ほとんどの場合、投稿者は自らを「母」と呼んだり、他の飼い主を「母」と呼ぶことによって、その「母親役割」を楽しんでいるように思える。これは、なぜ女性の投稿者が圧倒的に多いのかという問題ともつながってくるのだが、おそらく男性よりも女性の方が日常的に犬と関わっている時間が長く、犬の世話も多くは女性に任されているのではないかと思う⁽⁷⁾。だから女性は、男性よりも犬との生活を楽しみ、犬に関する話題も豊富であり、そうした中で、犬との関係において「(母) 親である自分」が強く意識されて、自ら積極的に母親役割を引き受けているのではないだろうか。こうした状況が、自らを「母」と呼ぶ居心地のよさを作っているのである。もちろん男性の飼い主にも「父」という呼称は与えられているが、日中は仕事に出かけて犬の世話は妻任せであるならば、その姿はよきマイホームパパとして投書の中に見え隠れする程度である。

4. 幼い「うちの子」

飼い主が「親」であるならば、犬は当然「子ども」として表現されることになる。自分の犬のことを「子」または「コ」（以下、「子」）と表現している投書は37で全体の19.2%、投書に登場する他の犬または犬一般を「子」と表現している（編集者のコメントも含む）のは27(15.0%)、全体として犬を「子」

と表現している投書数は56(29.0%)であった。

(1)「うちの子にはとてもとても…」と謙遜されていた方が結構いたのですが、レックスのような子でも参加できることを知って「次回はうちの犬も参加させてみようかしら？」という言葉を受けただけでも今回のイベントの目的を私なりに達成できたかな…と思っています。(5月号)

(2)犬たちも飼い主の方々も結構すんなりなじめて、(略)ワンコたちの話で盛り上がりました。初対面からボスの存在のコや、恥ずかしがり屋のコ、愛想のいいコ、我が道を行くコなどなど、いろいろな性格の犬たちに出会えて笑いも絶えませんでした。(9月号)

(1)は、自分の飼い犬を「(うちの)犬」ではなく「(うちの)子」と表現している典型例である。文脈から言っても、「犬」の代わりに「子」を用いる必然性はまったくないのだが、こうした表現を使うことによって、「うちの犬は単なる犬ではなくて、人間の子どもに等しい大切な存在なのだ」ということを暗に主張しているわけである。(2)は「お友達コーナー」で知り合った人たちと一緒に旅行に行った報告の一部である。これを見ると、同じ対象の犬を言うときでも、犬を漠然と表現するときには、少し距離をおいた感じで客観的に「犬」を、そこにいる犬に深く感情移入して表現するときには「子」を用いているようである。これは対象になっている犬に対する思いを表している一方で、「私はあなたの犬の存在を尊重しています」というその犬の飼い主たちに対する配慮でもある。

このように、飼い主は犬を人間の子どもに見立てて表現をしているが、この時「子ども」とは、一生養育と保護が必要な永遠の幼い子どもの意味で使っている。「これからはダックスを子どもとして育てよう！」(7月号)という意識は、投書でもしばしば見られる「育犬」(「育児」のもじり)ということばに象徴されている。また、犬の七五三のお参り⁽⁸⁾も行事として行なわれていることを付け加えておきたい。

さらに、投書の中の次のような表現からも、犬を幼い子どもと考えていることが推察できる。まず、犬の名前につける敬称は、メスが「ちゃん」オス

が「くん」という明確な規則性はなく、むしろ性別に関係なく「ちゃん」が用いられることが多い⁽⁹⁾。次に、人間の子どもの関わりで用いられるような幼児語が使われていることである。これはまだことばをきちんと理解できない子どもへの配慮がそのまま犬に対して行われていることの表れである。投書では、日常的なそうした話しことばが書きことばとなって表されているということなのであろう（例：「カエルさん」「ゴキブリさん」などの敬称づけ、「お友達」「お家」などの丁寧語、また「今はもうお漏らしもおイタもしないお利口さんになり、ひとりでお留守番ができるようになったメイです」のような子どもことば）。最後に、幼い子どもへ語りかけるような表現である（例：「これからいろいろな所に行こうね。そして元気でいてね、ケンちゃん」や「ママ、頑張るヨ」など）。

では、飼い主が幼い子どもという位置づけの犬を「娘／息子」や「女の子／男の子」と呼ぶときには、犬はどのように表現されるのであろうか。

5. 「らしさ」によって強まる擬人化

偶然かもしれないが、今回の調査では「娘／息子」に関しては、「息子」は以下の1例しかなく、後はすべて「娘」に関連した表現⁽¹⁰⁾であった。

(1) 我が家のひとり息子のチーズです。(9月号)

(2) トレスが一瞬のうちに食べ終わり、私がトレーを頭高く上げたとき、まさかうちの娘が1番に食べ終わっているとは思いませんでした。(10月号)

(3) ひとりっ子で産まれたせいもあってか、甘えん坊で臆病だけど、ちょっぴり気が強く、でも基本的にはノホホンとしている、とっても女の子らしい《箱入り娘》的な性格のチョコビン。(10月号)

(1)や(2)のように、「子」の言い換えとして、犬の性別のままに「息子」「娘」と呼んでいる場合はともかく、(3)のように「娘」が「女の子らしい」ということばと一緒に使われたものでは、文脈の中に飼い主の犬に対するジェンダー役割意識がうかがえる。この飼い主は「ひとりっ子」を理由に、「甘えん坊」「臆病」「気が強い」「のほほんとしている」性質が「女の子らしい箱入り娘」

であるとしているわけだが、そうした性質が「女の子らしい」ことや「箱入り娘」と関係があるかどうかは疑問である。

さて、メス犬とオス犬が「女の子／男の子」と区別して表現されると、「らしさ」のジェンダー表現に大きな変化が起こる。

(4) 今回のことでパグは男の子の方が優しくてかわいいと (略)。(1月号)

(5) 犬も人間と同じで、女の子はませていて早く大人になって、男の子はいつまでも子供のまま…。(3月号)

(6) 不思議なことに大のゴールデンのロイ、中のハスキーMIXのジョーは男の子なのに非常に大人しく、小のヨーキーMIXのラッキーは女の子でしかも1番おチビのくせに態度が大きかったのです。(4月号)

(7) 「男の子で年上なんだから、もっとしっかりしたら！！」(6月号)

(8) 「銀ちゃん、男の子だろ、負けちゃダメだ！！」(6月号)

(9) 無口な性格がまた男っぽいですね。まるで人間の男の子の成長ぶりを聞いているようです。(編集者のコメント、7月号)

説明の必要もないと思うが、書き手は犬の性格や行動、態度を人間の「女の子／男の子らしさ」と照らし合わせて判断している。ではこれがさらに、「女／男らしさ」に転じるとどうなるであろうか。

(10) モコちゃん一筋で駆け落ちまで考えていたようなG・レトリバーのリョオもやっぱり男なのか、浮気癖が出てきて (略)、今では散歩コースになる女の子が5匹もいます。(2月号)

(11) [ハッピー] 人間の奥様みたいに勘が鋭いです。今日も家に帰るとクンクン、クンクン、厳しい浮気のチェックが待っています。(7月号)

(12) ハッピーは中原家の第二夫人といったところでしょうか。この関係にお母さんがヤキモチを焼いたりしませんか？若くて、従順、そのうえ三つ指をついてお出迎え。今時、なかなか見つけることのできない女性(?)です。(編集者のコメント、8月号。投書には「新婚妻の雰囲気さえかもし出しています」とある)

(13) 世の中は母性愛だけではなく、父性愛もあるのだと海[犬の名前]を見て
思いました。(編集者のコメント、9月号)

(14) この2匹、夫婦なのですが、D・Jはなかなかの《カカア天下》で通って
います。(略) 小さいころからシュナに甘えて育ったワガママなD・J。そ
のせいで亭主関白になれなかった優しいシュナ。(10月号)

どれも「女／男らしさ」という規範に縛られた表現であるが、ここではその他の表現にも注目したい。「駆け落ち」「浮気癖」「浮気のチェック」「第二夫人」「三つ指をつく」「夫婦」など、先の(1)～(9)の引用に比べて、全体的により犬の擬人化がすすんでいるのが分かる。犬の具体的な性質や行動を「女／男らしさ」で描写すればするほど、他の描写においても擬人化が起りやすくなるようだ。

人間にこうしたジェンダー表現が用いられると、特定の性を一面的にしか表さないために直接性差別的な表現になってしまう。これは表現の対象が犬であっても、広い意味では同じである。だが犬の場合は、書き手はこうした「らしさ」による擬人化によって、自分の犬が如何に個性的で可愛いかを伝えたいということなのであって、自分の犬が「女／男らしく」ないことが特に問題視されているわけではない。もちろん、こうした表現の中に、書き手のジェンダー意識が暴露されているのは言うまでもない。

6. 犬の「姉妹・兄弟」関係

「家族」関係の中における犬の「姉妹・兄弟」について述べる前に、一般に犬の同胎子（一度に産まれたひと胎の仔）がどのように表現されているのかを整理しておきたい。例えば、ジャパンケンネルクラブ(JKC)の血統書⁽¹¹⁾では、「牡」「牝」の順に出産頭数が記入されているだけで、どの犬が「姉」であるか「弟」であるかなどは分からない。つまり犬の「姉妹・兄弟」関係を明記する必要性がないわけである。

『WAN』には、掲示板的な働きをもつ「Wan Club Network! (ワンクラブネットワーク)」⁽¹²⁾ というページがある。その中の「さがしています」の内容

は自分の犬の同胎子を探しているものがほとんどで、犬種と生年月日、繁殖者（ブリーダー）名などが記されている。ではここで探している同胎子はどのように表記されているだろうか（表2）。

（表2）
「さがしています」のコーナーにみられる犬の「姉妹・兄弟」の表記
（数字は投書の数）

兄弟犬	56 (84.8%)
兄妹犬	5 (7.6%)
兄弟&姉妹犬	2 (3.0%)
兄弟・妹犬	1 (1.5%)
姉妹犬	1 (1.5%)
同胎犬	1 (1.5%)
合計	66 (99.9%)

圧倒的に多いのが「兄弟犬」で、姉妹・兄弟を表す総称として「兄弟」が無条件に使われていることが分かる。もちろん、同胎子にオスしかいない場合に「兄弟」とするのは自然だが、中には探している同胎子はメスしかいないのにも関わらず「兄弟」と書いていたり、冒頭またはタイトルに「兄弟犬」と書いているのに、具体的な内容になると「キョウダイ」や「姉妹犬」と言い換えている場合もある。実態を見ずに「兄弟」を押し通すのか、実態とのずれを感じて表記を工夫するのかといった中に、書き手の混乱が見られる。

こうした形式的な記述については、伝統的な文法に則った表記「兄弟」が優勢であるが、「家族」としての犬が「子ども」として表現されるときには間違ってもメス犬を「兄」や「弟」で呼ぶことはない。次の例は「家族」として犬を迎えたときの典型的な紹介文である。人間の場合と同じように、「姉妹・兄弟」の呼称を使うと性別と年齢の上下関係がすぐに分かる。

- (1) 我が家の一人娘だったM・ダックスのマロ（5歳7ヵ月）に去年の秋、妹ができました。（6月号）

では次のような場合はどうだろう。

- (2) お兄ちゃんの茂ちゃんは相変わらず泰になにをされても我慢の毎日です。（7月号）

- (3) でも、案外メリーやポーロはペチカを手のひらでコロコロと可愛がっているだけかもしれないと思えるようになってきました。だとしたら、

なんて寛大なお姉さん、お兄さんなんでしょう！(8月号)

- (4) うちの長女はE・コッカー・スパニエルのグレースです。(略) あるときは『目指せ看板娘』だったはずなのに、いまや立派なベビーシッターに成長しました。というのも、昨年6月に人間の弟、航也が増えたからです。(略) もちろん、航也ばかりに手がかかっているときはさびしい表情をすることもあるけれど、とてもよいお姉ちゃんぶり。(11月号)

犬の「姉妹・兄弟」に関しては、少なくとも今回の調査では性役割が強調されたジェンダー表現はなく、どちらかというと、「姉／兄」が先住犬（家で先に飼われていた犬）であることに焦点があてられているようである。上記引用の(2)と(3)の中には「兄」だから「姉」だからといったジェンダー役割は見られない。また、犬はその家の「子ども」であるために(4)のような表現も許容され、犬と人間の子どもの関係が先住の順序のままに「姉弟」として表されている。ここでは「看板娘」「ベビーシッター」と若干の性役割もうかがえるのは確かだが、どちらかというと「姉」であることよりも「年上」(先住)であることに重点がおかれているように思われる。

こう考えると、一般的な表記の「兄弟姉妹」の語の並びからも分かるように、人間の場合は、産まれた順序よりも性役割を基盤として成り立っていて、「女・女・男」の順で生まれた子どもたちは、つまるところは「長男と姉妹」として振り分けられてしまう⁽¹³⁾。こうした表記によって、長男は家の第一番目の男子としての家庭内の役割と、未来の「家長」としての社会的な役割を担う（負わされる）ことが強調される。

だが、これを犬にあてはめるのは難しい。つまり、動物行動学的な視点からごく一般的に言って、犬にとって生活を共にしている家庭は自分の属する「群れ」であり、年齢（家に来た順序）が序列を決める大きな要因となる。だから、犬の「姉妹・兄弟」関係は、人間の基準で作った「姉」か「兄」かといった性による区別を伴う表現では表しにくくなっているのではないかと。要するに、犬の「姉妹・兄弟」をうまく擬人化することが難しいのである。したがって、犬の「姉妹・兄弟」関係を表す表現は人間のジェンダーの影響を

比較的受けにくいのである。

7. おわりに

犬は決して人間の「家族」などではない。限りなく家族に近い関係性をもった存在なのである。だからこそあえて「犬は家族の一員だ」と言うのである。ちなみに、「家」や「家族」を意識した言い方である「我が家」や「〇〇家」を犬と関連づけた言い回し（「我が家の愛犬のラブちゃん」、「上野家に2代目犬のパピヨンの風吹がやってきました」など）は、掲載総数193のうちのほぼ半数にのぼる97（50.3%）の投書で用いられていた。これに「うち」や「家（うち）」の言い回しを加えるとさらに数字が増えるのは必至である。

犬が特徴的に他の伴侶動物と異なるのは、ひとつには、犬には群れの中での序列意識が強く、アルファ（序列最上位）である人間に従う性質があるということである。これが、人間の親が子どもを世話したりしつれたりする関係とみごとに合致するので、人間が猫や鳥などの他の伴侶動物に接する時とは異なるコミュニケーションが家庭内に存在する。犬への訓練（しつけ）を通して—それが成功しても失敗しても—飼い主と犬は日常的に絶えずコミュニケーションをとることになるので、犬を含めた「家族」内でこうしたコミュニケーションの場が生じるのだ。

またもうひとつの特徴として、犬は散歩などで家の外の行動を人間と共にするという点が挙げられる。だから、飼い主は犬との生活を通して、家庭内だけでなくとどまらない広いコミュニケーションの場を持つことになる。人間は犬と生活することによって、他の伴侶動物とは質の違う「家族」関係を持ちやすいのだと言える。もちろんこれはあくまでも関係性のことを言っているのであって、犬が他の伴侶動物より優っているという意味ではない。

こうした独自のコミュニケーションの場で人間と犬とが「家族」という関係性の中で表現されるときには、人間のもつジェンダー規範が映し出されるのは間違いのないことである。だが、犬はあるときは生物学的側面から犬科の動物として表現され、またあるときは文化的・社会的な側面から「家族の一員」として表現される。犬についての表現はこの両極の間で揺れ動いてい

て、これが擬人化と大きく関係している。

遺伝的に受け継がれる生物学的な骨格と性格をもつ「メス／オスらしさ」で犬を描写する限りにおいては、文化的・社会的性であるジェンダーは入り込みにくい。なぜなら、このときの「メス／オスらしさ」は犬本来の生物学的性としての特徴でしかないからだ。だがそれがひとたび人間の「女／男らしさ」で表現されるとき、そこにすぐさま人間の文化的・社会的性が滑り込むのである。そして擬人化が起こる。

少し分かりやすく説明するために、次のような例文を作ってみた。メス／オスそれぞれの2文はほぼ同じ内容であるが、1番目の文は遺伝的な生物学的性で表した犬の特徴で、2番目はジェンダーを通して擬人化された犬の描写である。

メス：メス犬は表情が柔らかく、その性質は穏やかだ

ウチの子は女の子らしい顔をしているし、性格もとても優しい

オス：オス犬はがっちりした体つきで、縄張り意識が強い

うちの犬はマッチョな肉体派という感じで、とにかく喧嘩っ早い

飼い主の犬に対するジェンダー意識の程度はさまざまである。例えば「犬の頭にリボンをつける」という擬人的な装飾を思い浮かべてみよう。ある飼い主は「犬なんかにリボンはつけない」と言うであろう。またある飼い主は「うちはオスだからリボンはつけない」と言うであろう。そしてまたある飼い主は「うちはオスだから青のリボンにする」と言うかもしれない。要するに、生物学的側面からのみ犬を捉えれば、犬にリボンをつけることは奇妙に思え、文化的・社会的側面からのみ犬を捉えれば、オス犬には青が似合うと思うのである。これを見ても、ジェンダー表現は犬の擬人化の最たるものであると考えていいだろう。

このように考えると、ジェンダー表現で犬を描写しがちな飼い主は、単純に犬を擬人化するよりも、犬の性別に沿って擬人化するほうが、自分の犬をより具体的、特徴的、個性的に表現できているのであろう。そして犬にジェンダーを負わせて人間的に描くことこそが、犬が「家族の一員」で

ある証だと考えているのではないだろうか。

犬をどのような意味で「家族の一員」と捉えるのかはそれぞれの飼い主の意識によるのだが、極端に犬を擬人化してジェンダーを負わせることは、犬という動物本来の生と性を歪める危険性があるのではないかと思われてならないのだ。

注

- (1) ここで言う「ハーフ」とは、例えば「日本人とアメリカ人のハーフ」という意味合いを猫に対して使ったもので、異なる純血種どうしを交配した第一世代(F1)のことを指す。「ハーフ」ということは差別的に響くので、安易に動物に転用すべきではないと指摘しておく。また、雑種の猫に対して「ミックス」と呼んだり、犬に対して「ハーフ」と呼んだりすることもある。
- (2) 7月号からは「!」マークがついていない「Letter Box」。
- (3) ほとんどの投書にはそれぞれ編集者の80～160字程度のコメントがついている。
- (4) 投書かそれに対する編集者のコメントの中に、「母」や「父」のどちらかまたはその両方があればそれを「1」として数えている。以降の「子」のデータについても同じ。
- (5) こうした造語はテレビのワイドショーや週刊誌で、話題の芸能人を指し示すときに使われる。「アンナパパ」（梅宮アンナの父、梅宮辰夫）や、少し古いところでは「りえママ」（宮沢りえの母）などの例がある。しかしながらこの場合は決して自称として用いられることはなく、あくまでも印象づけを狙って呼びやすさを強調した呼称である。
- (6) 語尾の「ズ」は、英語の単数または複数の名詞につく所有格から来ているともとれるが、この書き手は複数頭のプードルを飼っており、他の投書では「彼らプーちゃんズは」という言い回しが使われているので、この場合は複数形ととる方が自然であろう。
- (7) 女性の投書180のうち、「主婦」（「兼業主婦」と「主婦&トリマー」を含む）(70)、「家事手伝い」(1)、「パート」(3)で全体の41.1%を占める。次に多いのが、職業の記入がない「不明」で67 (37.2%)。「会社員」(13)、「学生」(4)、「看護婦」(3)が後に続く。
- (8) 人間の七五三は女子が数え年の3歳と7歳、男子が5歳と7歳のときに行うが、犬の場合は性、年齢の別なく11月15日に神社にお参りに行くというもの。

- (9) 犬の名づけ（呼称）については、佐々木恵理「動物をめぐることばと表現(1)―犬の雑誌にみられる性差別的表現とジェンダー表現」(『ことば』21号、現代日本語研究会、2000年)を参照のこと。
- (10)「娘」に関連した表現は、「娘」(7)、「一人娘」(2)と、「臆病娘」「お転婆娘」「看板娘」「箱入り娘」(それぞれ、1)。また、「お嬢様(育ち)」(3)、「恋する乙女」(1)「夢見る乙女」(1)という表現もあった。
- (11) ジャパンケンネルクラブは、犬籍登録と国際公認血統証明書の発行を行っている社团法人(1949年創立)。各種ドッグショー、競技会等を開催している。国際畜犬連盟(FCI)、アジア畜犬連盟(AKU)に加盟。参考にした国際公認血統証明書は、犬種：ゴールデン・レトリバー、登録番号：RG-34429/96(1996年8月28日発行)と、犬種：バーニーズ・マウンテン・ドッグ、登録番号：BN-01388/98(1998年7月7日発行)である。
- (12) 7月号からはそれぞれ、「Wan Club Network!!」、「探しています」。
- (13)「日本語の『親族名称』」の分析で、『兄』という言葉の意味は、『父』からは[親等]で区別され、『弟』からは[生まれ順]で区別されるが、『母・姉・妹』からは単に[性]で区別されているだけである」中村桃子『ことばとフェミニズム』(勁草書房、1995年)p. 31。

参考文献

遠藤織枝編『女性の呼び方大研究』三省堂、1992年

ことばと女を考える会『国語辞典にみる女性差別』三一新書、1985年

* 犬の行動学、訓練、犬種スタンダードに関する図鑑および単犬種の解説本、また人間との関わりについて書かれた書籍等の参考文献は相当数にのぼるので、ここではすべて割愛する。犬に関する文献はウェブ上で公開しているので参照のこと。

[http://plaza29.mbn.or.jp/~anzutotsubame/library for dog lovers.htm](http://plaza29.mbn.or.jp/~anzutotsubame/library%20for%20dog%20lovers.htm) (2001年12月現在)

(ささき えり)